

<インタビュー>

- 1. エコロジーの神学の諸問題
- 2. ティリッヒ 生の次元論

3. 宗教言語と科学言語

- 3 - 1 : 隠喩とモデル
- 3 - 2 : レトリックから見た宗教と科学
- 3 - 3 : 言語・想像力・倫理

3 - 1 : 隠喩とモデル

(1) マクフェイグ神学

- 1. 著作
- 2. マクフェイグの前提・背景
  - ・言語論的転回とその実質的な具体化
  - ・解放の神学・フェミニスト神学      エコロジーの神学

(2) 現代思想における隠喩論・モデル論

<伝統的な隠喩論の特徴>

旧修辞学

<隠喩の意味と指示>

Ricoeur 1: true metaphors are untranslatable.

2: It includes new information.

In short, metaphor says something new about reality.

(3) マクフェイグの隠喩神学

隠喩

譬え・物語

認知・経験の問題として

緊張、新しい見方

be / not be

cf. 象徴

モデル

倫理・実践

概念

(4) ブラック、ヘッセのモデル論

(5) マクフェイグのモデル論

隠喩・モデルの複数性

「隠喩は常に<である>と<ではない>という性格を持つ。ある主張がなされる場合、それは定義(definition)としてではなく適切な説明(account)としてなされるのである。すなわち、<神は母である>と言うことは、神を母と定義したり、<神>と<母>という用語の

同一性を主張したりしているのではなく、我々がどう語ってよいのかわからない事柄を  
- 神に関連して - 母という隠喩を通して考察していることを示唆しているのである」  
(ibid.,p.33f.)。

「語りうる最大のことは、<神 - 世界>関係の一定の局面あるいは諸局面がこれこれの  
モデルによって特定の時間と場所にふさわしい仕方で照らし出されているということなの  
である」(ibid.,p.38f.)。

<ポイント>

- (1) 隠喩と象徴との関連
- (2) モデルの複数性の意義、経験の多様性と宗教としての統合性
- (3) 現実概念・真理概念の拡張

### 3 - 2 : レトリックから見た宗教と科学

<問題>

宗教と科学との関係論へ言語の視点からアプローチすること

1. 実在論・真理論：隠喩の指示機能を手がかりに、実在・真理概念の拡張
2. 説得性の問題
3. 実践との関わり

<文献>

- 1 . Kenneth Burke, *The Rhetoric of Religion*, University of California Press 1970(1961)
- 2 . Alan G. Gross, *The Rhetoric of Science*, Harvard University, Press 1990
- 3 . Ch.Perelman and L.Olbrechts-Tyteca, *The New Rhetoric. A Treatise on Argumentation*,  
University of Notre Dame Press 1971(1969)
- 4 . 佐藤文隆 『科学と幸福』 岩波書店 1995  
『量子力学のイデオロギー』 青土社 1997
- 5 . 芦名定道 「キリスト教と近代自然科学 - ニュートンとニュートン主義を中心に - 」  
『京都大学文学部研究紀要』第38号 1999年、pp.147-244  
『ティリッヒのユートピア論』、『ティリッヒ研究』第3号 2001年  
現代キリスト教思想研究会  
『キリスト教と現代 終末思想の歴史的展開』(小原克博氏と共著)  
世界思想社 2001年
- 6 . Hill[1986] : *The Collected Essays of Christopher Hill. Volume Two. Religion and Politics  
in 17th Century England*, The Harvester Press
- 7 . Jacob[1976] : Margaret C. Jacob, *The Newtonians and the English Revolution 1689-1720*,  
Gordon and Breach  
[1986] : *Christianity and the Newtonian Worldview*, in: Lindberg/Numbers[1986]  
[1997] : *Scientific Culture and the Making of the Industrial West*, Oxford Univ.  
Press
- 8 . Ricoeur[1977] : Paul Ricoeur, *Die Hermeneutik der Säkularisierung. Glaube, Ideologie*,

( 1 ) 宗教と科学における言述の説得力

1 . 科学 : 客観的で価値中立的 ? 啓蒙主義的科学観、実証主義的イメージ

2 . 宗教のイデオロギー性・ユートピア性 社会的構想力

宗教と科学とが重なり合う領域

( 2 ) 社会的構想力から見た宗教と科学

3 . 社会的機能から見た宗教 ( 意味世界の正当化という宗教的機能 )

意味世界は、究極的根拠 ( 意味根拠 ) をそれ自体の内に有してはいない - 「世界の無根拠さ」(ハイデッガー)、「存在論的不安」(ティリッヒ) - 。そこで、社会システムは、そのシステムが不安定化したときにはシステムの正当性を弁証するというメカニズムを、それ自体の内に前もって組み込んで置く必要がある。人類の歴史において長い間、この人間の日常的現実性を正当化し社会システムの統合秩序を支えてきたのが、意味根拠としての「伝統的な制度化された諸宗教」(狭義の宗教)だったのである。

4 . 「科学的である」との言明の説得性の発生と近代世界

説得性の担い手の移行 : 宗教から科学へ

多面にわたる諸課題を解決し新しい時代状況にふさわしい秩序・安定性を確保するには、伝統的な正当化のメカニズムではもはや十分に対処できない。従来教会や聖書の権威に基づく正当化が機能不全に陥っており ( 16 世紀の宗教戦争がキリスト教界の多元化を生じたことに起因する )、ここにそれを補強するものとして「新しい科学」の有意義性がクローズアップされることになる。自由思想家とニュートン主義者との論争が示すように、科学性こそが自説を主張するための重要なレトリックとして意識されるようになったのが 17 世紀から 18 世紀にかけての状況と言える。

5 . ニュートン主義の自然神学

ニュートン科学の説得性に依拠したキリスト教の正当化

ニュートン主義者との論争は自然界の諸現象についての新しい科学的知見の解釈をめぐる理論的基盤においてなされており、我々はここに宗教、政治、科学という三者の密接な問題連関を確認することができるのである ( Jacob [1976], pp.234-244 )。

「同様にすべての植物、動物、惑星はあるべき場所を持っており、人間はその天職に従事するならば、社会の中に予定された不変の場所を有するのである。天体の静穏、平静は国家における静穏、平静と似ている」(ibid.,p.63)。「秩序を与える神、宇宙の支配者という考えは、教会の政治的社会的教説の基礎となった。神の摂理は実在のすべての局面において作用している。自然の秩序においてまた人間的事柄の世界において、人間は自然法則を動かし人間的事柄を方向付ける神の保持的摂理を観察することができる」(ibid.,p.96)。

6 . 「こうした新しい挑戦の結果、理神論者、無神論者、リベリタン、そして最後には汎神論者といったあだ名がさかんに投げかけられ、これらの言葉はその有効な意味を全く失ってしまった。教会の徹底的な敵対者は自由思想家 ( freethinkers ) と呼ぶのが好ましい」(ibid., p.202)。「教会が自由思想家の新たなエネルギーを恐れたのは、彼らが理神論から汎神論に至るすべての非正統的思想を助長したからではなく、彼らが自由思想を徹底的な

共和主義政略と結びつけたからである」(ibid.,p.208)。

「千年王国主義は17世紀を通してイギリスの宗教思想の持続的な一局面であり続けたが、この世紀末までには大部分の非国教派の諸分派は、以前のその熱情の絶対必要な部分であった熱狂さを失ってしまった。非国教徒たちはしだいに尊敬と富を身につけるようになり、はでな千年王国主義は再洗礼派、フィラデルフィア派、いくつかのクエーカーの分派においてのみ認知できるにすぎない。このような分派はそれらと混同されることによって非難されることを恐れる穏健な非国教徒にとってあいかわらず悩みの種であり、熱狂主義的な分派主義の解体力を恐れる国教徒の悩みの種でもあった」(ibid.,p.260)。

#### 7. 広教主義(穏健中道的な近代化)の立場

絶対王政(強権的な国教会)と共和制(自由思想)との間

自然哲学に社会的意味づけを行ったこと。キリスト教信仰は合理的議論の事柄であり、それは宇宙を解明する手段である科学と調和的であるという信念の内に見ることができ。科学は唯物論や無神論を論駁し、宗教的熱狂を撃退するものとして機能できるのである。

第二の特徴は市場経済をキリスト教化するという意図に現れている(キリスト教化された資本主義)。見えざる神の手によって導かれる節度ある市場経済を肯定しているのである。

#### (3) キリスト教の社会的構想力

#### 8. 知恵思想とイエスの宗教運動

#### 9. 二つの知恵：慣習的知恵と転換的知恵 説得の二つの形

John Dominic Crossan, *Jesus A Revolutionary Biography*, HarperSanFrancisco 1995

Marcus J. Borg, *Jesus in contemporary scholarship*, Trinity Press International 1994

My own portrait of Jesus is developed in two books, *Conflict, Holiness and Politics in the Teachings of Jesus* (1984), and *Jesus: A New Vision* (1987). In these two books, a sketch of Jesus with four main strokes emerges: he was a charismatic healer or "holy person," a subversive sage who undermined conventional wisdom and taught an alternative wisdom, a social prophet, and an initiator of a movement the purpose of which was the revitalization of Israel. (26)

10. 未来的終末論から区別される別のタイプの終末論として、「現在のないし知恵志向的なヴィジョン」が挙げられる。「『知恵志向的』(sapiential)という用語は、神の力、支配、統治が見る者すべてに明白に及ぶように、この世界の今ここで生きようとする者には、知恵(ラテン語のサピエンチア)が必要であるという認識に結びついている」〔クロッサン、一九九八、一〇二頁〕。「転換的知恵」はそのうちに黙示思想と同様の現実批判を可能にする大きなパワーを秘めていたのである。イエス自身あるいは少なくとも最初期のイエス運動(Q1)に見られるのは知恵的な社会批判であり、黙示的終末論が登場するのは、五〇年代から六〇年代にかけてユダヤ戦争の文脈で展開するQ2の段階においてなのである〔マック、一九九八、八〇頁〕。

#### (4) 社会的構想力の説得性と象徴機能

## 11. 宗教におけるユートピア機能とイデオロギー機能の二重性

「諸民族の生におけるユートピアの政治的意義」(1951)

Die politische Bedeutung der Utopie im Leben der Völker, in: MW.3

「もし、ユートピアが価値のない幻想以外の何ものであるとするならば、それは人間の構造自体の中に基礎を持たねばならない」(Tillich[1951b], S.532)。

「ユートピア的な諸形式で思惟することが人間存在に属するとするならば、ユートピアは人間が取り除きうるものではなく、人間が存在する限り存続するものなのである」(ibid.)。

## 12. ティリッヒのユートピア論：ユートピアがしばしば無価値な幻想に陥るにもかかわらず、それが人間にとってなおも意味であるという点をどのように理解するのか。

人間存在の存在論的分析      人間存在の根本的な存在様態である有限性あるいは有限的自由      存在論的不安      この不安のただ中で自らの存在を肯定する勇氣

## 13. 人間存在の存在構造から見たユートピア：

人間はその存在を構成する時間性に基づいて、未来への関わり(=志向性)を本質的に自らの内に備えているのであるから、ユートピアは単なる偶発的な事柄ではなく、人間存在自体に根ざしていると考えられねばならない。しかし同時に、未来への関わり(待望)においても、人間は不安と勇氣の二重性(両義性)を脱出することはできない。ユートピアは必然的に光と影の二つの顔を持つ。

14. ユートピアの肯定：ユートピアは到来せんとするもの - 社会的なものであれ、あるいは個人的なものであれ - の真理を、具体的なイメージへともたらずものであり、その点で、「ユートピアは真理である」。「ユートピアは人間の本質、つまり人間の実存の内的目的を表現する」(ibid.,S.568)のである。またユートピアは、それがもたらす豊かなイメージなしには人類が意識化できなかったような無数の可能性を先取りの開示する。ここに、「ユートピアの豊穡さ(Furchtbarkeit)」がある。こうした真理と豊穡さを持つものであるかぎり、ユートピアは人間の感性に直接訴えかけ人間を行動へと駆り立てるものとなる。つまり、ユートピアは所与のものを変革する力(Macht)を有しているのである。ユートピアは、理性と感性の統合機能としての構想力自体に本質的に備わっていると考えてよいであろう。

15. ユートピアの否定面。まず、ユートピアを語る者は人間が疎外状況から救済されねばならないと主張する。これは真理である。しかし、ユートピアを語る者自身が疎外の内にあることを考えれば、この主張は水に溺れている者が自分と他者とを綱で岸へ引き上げることができるというのに等しい。ここに人間の自己救済と共通するユートピアの自己矛盾がある。すなわち、ユートピアは非真理性であり、人間の疎外状況を越えようとするものの、「それがいかにして可能であるか」を真実には語らないのである(ibid.,S.570)。また、ユートピアは不可能なものをあたかも可能であるかのように見せかけ、「幻想的に誇張された願望」へと人間を導くものであるかぎり、不毛であって、そこからは新しいものは何も生まれぬ。したがって、ユートピアは人間を幻滅に陥れるだけの無力なものと見なされねばならない。歴史の両義性を無視したユートピア主義は、「字義通りに解すれば、偶像礼拝」(Tillich[1963a], p. 355)なのである。

## 16. 議論の要点

ユートピアは人間存在自体に根ざすものであり、人間が人間であり続けるかぎり、消滅することはない。人間はユートピアを必要とし、ユートピアは、構想力を通して、常に新たな形態を獲得するのである。

ユートピアは両義的である。真理であると同時に、非真理である。これは、次章に見る、ユートピア主義とユートピアの精神との区別という議論へと展開される。ユートピアの否定面、つまりユートピア主義は克服されねばならない。

## 17. 説得力と象徴との関連

・ 隠喩と象徴との関係 : 言語的要素と非言語的要素

マクファイグ : 差異と類似

・ 多次元的な作用 (意味と力)

ヴィジョン喚起力、多次元的な作用

## 18. Paul Ricoeur, Parole et Symbole 1975

Le second défaut du concept de symbole est de mettre en rapport deux dimensions, deux niveaux, voire deux univers de discours, l'un d'ordre linguistique et l'autre d'ordre non linguistique.

(143)

Mais il y a plus dans le symbole que dans la métaphore. La métaphore est seulement le procédé linguistique --- la prédication bizzare, dans laquelle vient se déposer la puissance symbolique. Le symbole reste un phénomène bi-dimensionnel dans la mesure où la face sémantique renvoie à la face non-sémantique. Le symbole est lié. Le symbole a des racines. Le symbole plonge dans l'expérience ténébreuse de la Puissance.

La métaphore est seulement la surface linguistique qui doit à sa bi-dimensionnalité le pouvoir de relier le sémantique au pré-sémantique dans la profondeur de l'expérience humaine. (161)